

# 私の幼児教育論Ⅲ

## “保育の基本”（一）

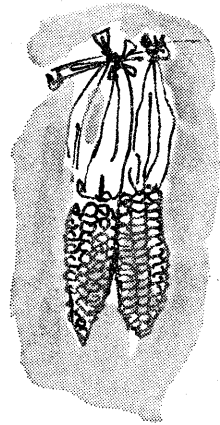
### 三、保育の基本

—— 幼児とのかかわり合いの中で ——

#### (1) “幼児とともに”生活する

現場における保育というものは、幼児と保育者がともに生活するということの中でなされなければならないし、“幼児とともに”生活するというの中にこそ、現場での保育の最大の意義があるということについては、前回でみてきた。

このことは、換言すれば、保育というものは幼児と保育者とのかかわり合いの中でなされるということでもある。だから、保育の中で、保育者が幼児とどのようなかかわり合いをもつかということとは、保育のもっとも基本的な問題であり、ある意味において



神 沢 良 輔

は、それは保育以前の問題であるともいうことができよう。

ここでは、保育の基本などという、大きな題をかかげたけれど、それは、幼児とともに生活している現場での実践の中で、幼児と保育者とのかかわり合いを、保育者の側からみて、どのようなことについて留意する必要があるのか、またそのため、どのようなことについて努力をしていかなければいけないかということでもある。

このような努力は、保育者という人間そのものに対しても、また、保育者のもつ教養、識見なども広く関係すると思われるが、ここでは、私の現場での経験をもとにして、実践場面における問題点のいくつかをとりだして、それについて、見ていきたいと思うのである。

しかし、それは、ある意味では保育者としては、きわめてあたりまえのことであり、自明のことでもある。だが、このようなあたりまえの自明のことについて、つねに留意して十分に実践することまたきわめて困難なことなのである。そこに、保育の基本たるゆえんがあるかもしれない。つまり、あたりまえの人間として、自分を反省しながら保育するところに、保育者としての意義もあると思われる。

## (ii) 幼児の一日の生活は、朝の一瞬できまる

朝、登園してきたひとりひとりの幼児と保育者との目があう。そこから保育が始まる。それは保育者の優しいまなざしであり、幼児を愛情でつつんでいるまなざしでもある。幼児たちはこのような保育者のまなざしから、保育者という人間を感じ、元気のよい生命力に満ちあふれたまなざしを保育者に返すであらう。そして、そのような人間としての関係の中で幼児は安定していくし、園での活動に本気になってとりくむことが可能になる。このようなことは、どの園でもなされていることであり、いまさらとりたてていうまでもないことであるが、しかし、このようなことを毎日くり返すことは、決して容易なことではない。保育者とても人間である。毎日が決して楽しい日ばかりではない。不快な日や

心配ごとのある日もあるであらう。でも園へは、そんなことは関係なく幼児が登園してくるのである。そして朝登園してきた幼児は、まず最初に保育者の目を見つめるのである。だから、どうしても朝の幼児との出会いまでに、自分の感情を整理しておく必要がある。もし、そのような感情が残っていれば、保育者のまなざしから、幼児は敏感に自分の感情を反映させて、保育者の感情を受け入れなくなってしまう。

「今日はどうも、子どもとしつくりいかなかった」などということとを、保育者から聞くことがある。もちろん、このような反省は、保育者として決して悪いことではないが、この場合、意外に、保育者が、不安定な感情をもって朝の出会いをしたため、幼児が不安定になってしまったことを無視して、幼児の方にその原因を求めたため、このようなことがでたのではないかということを感じるの、私のみではないだろう。

だから、私のように園長であったという立場から見れば、幼児についてはいうまでもないが、まず朝元気に、発らつとして出勤してくる保育者を見ることが、一日の生活の中で、さわやかな感動をよぶ時間であるとともに、その保育者が、保育室へいったあとで、ひとりひとりの幼児と、元気に楽しく、朝の出会いやあいさつをしている声が聞こえてくる一瞬に、快い緊張感の解放を感じ

じるとともに、一日の活力を得る思いがしてならなかった。またこのような状態が毎日続くことを祈る思いでもあった。

そのためには、まず保育者間の朝のすがすがしい、発らつとしたあいさつによって、保育者相互の信頼感と、職場としての活力あふれる明るいふん囲気をつくりあげる必要がある。また、このようなふん囲気の中で、保育者自身も情緒が安定化でき、幼児との朝の出会いができればと思うのである。

いずれにしても、幼児の園での一日の生活は、保育者と出会う朝の一瞬でさまる場合が多いし、幼児は、そのようなくり返しによって発達していつているということができよう。そのためには、幼児と接する保育者のまなざしというものが、とても重要なものとなる。

#### (画) 幼児の目の高さで接する

私は、幼児と接しはじめたころ、幼児のいすになかなかすわれなかった。それは、幼児のいすが余りにも小さいということもあるが、でも実際に保育している保育者は、案外平気ですわっているのであるから、そんなことは理由にはならないということになる。

それは、保育の実際場面の中では、私のような、ちん入者にと

っては、保育室の中での自分の占める位置や場所がよくわからなかったためかということのようである。つまり、勝手なところにすわると、幼児の活動のじゃまをしないか、また、保育者に迷惑をかけはしないかという懸念によるものである。

でも、少し慣れて幼児の活動の発展の状態や、保育者の動きなども、わずかながらわかってくると、保育室の空間の中で、私の占めてもよい空間が何となくわかってくるようになり、やがてあいているいすをみつめて、すわることが可能になってきた。

このようなことが、いつごろから可能になったかは、今は記憶にはないが、しかし、いすにすわることができるようになってから、幼児の世界が一変したことだけは確かな事実である。

これまでは、私は幼児を上の方から見おろしていた。幼児も私を見るには、顔をあげなくてはいけない。でも、いすにすわれば、幼児と目の高さは同じになる。このような視点で幼児を見ると、同じ幼児でも、幼児そのものが全然違って見えるということである。顔をあげているときの幼児の目は、すこしいきすぎれば、おとなの権威に対して何かを求めたり、服従している目であり、また、おとなに迎合して何かを訴えている目であり、決して幼児そのものの目ではないということであった。

それに反して、幼児と同じ目の高さになったとき、いかに、幼

児の目が生命刀にあふれているかということに驚嘆せざるを得なかった。幼児は、笑みをたたえ、豊かな表情で私に接してくれるのである。そして、すわって動いていかないという安定感から、また、目と目があうという安心感からでもあらうか、幼児は私のそばへよってきてくれるし、遊びに参加するように求めたりもする。

これまで、少し私自身のことを書きすぎたきらいがあるが、いずれにせよ、現場での保育では、朝の出会いの場面ではいうに及ばず、保育の場面で幼児と目の高さで接することは、やはり保育のもっとも基本であらう。つまり、目の高さで接することにより、幼児の心の動きが、直接保育者によりとれるということになるし、幼児も安心して保育者に接することができるのである。

それは、必ずしもいすにすわるということがもともといとは限らないであらう。たとえば、逆に幼児を抱いてやって、幼児の目の高さを、保育者の側の目の高さに合わせてことだっていいことだし、いすなど使わずに、保育室の床にすわりこんだってよいであらう。もちろん、幼児を抱いてやるということは、目の高さがあるということ以外に、幼児との身体的な接触もできるということになり、二重に幼児に安定感をもたせるということになるう。

いずれにしても、優れた保育者ほど保育の場面での姿勢が低いということも事実であらう。

いうまでもなく、保育者が、立ったままの姿勢で頭をさげるようにしても、幼児との目の高さは合うことになるが、このような姿勢ではやはり、幼児の本当の姿はわからない場合が多い。このような姿勢では、幼児にとっては、いつもとのように立ち上がるかわからない不安があるし、わざとらしく感ずることもあらう。それより、保育者の方がこのような姿勢はいつまでも長続きしないということになる。疲労へもつながるということにもなる。

いずれにしても、幼児と同じ目の高さで接することにより、幼児に安定感をもたせ、幼児との人間関係に入るとともに、幼児の本当の姿が理解されるということは確かなことであらう。